

図1 | 老健事例 座位姿勢と圧分布

左上：前傾姿勢 左下：1点支持の高い圧分布 中上：前傾した食事姿勢 右上：頭部が安定した食事姿勢 右下：圧分散された座面

る機能訓練を継続している。

今回、安楽姿勢と活動姿勢の2つの姿勢を評価した。安楽姿勢においてネットィ・ビジョンを使用することで車椅子座位時の頸部の過緊張が軽減し前傾姿勢や覚醒度に改善が見られたと考えられる。引き続きシーティング・チームがかかわり多職種連携のもと日常生活のフォローを行っていく。

3. 特別養護老人ホーム福寿苑の事例：認知症・交通事故による複雑骨折の男性の食事動作改善事例

1) 事例紹介

90代男性、認知症・交通事故による骨折・肺炎の既往あり。2017年に胆嚢炎、尿路感染、尿閉にて入院され、退院と同時に当施設へ入居となる。

入居時の心身状況：①身体機能として両股関節の屈曲制限0~80°、右股関節外旋・外転傾向、

左足尖足位、両肩関節屈曲0~50°、外転0~45°にて制限あり。筋力は体幹筋3レベル、下肢4、上肢4レベル。②認知機能の低下により正確な意思の伝達は困難となっているが、痛みや要求を伝えることは可能。

入居者の経過と目的：日中の活動の際、車椅子を利用すると、乗車直後より殿部を前方へずらすことが多く頻りに姿勢修正が必要な状態であった。本人から「尻が痛い」との訴えも聞かれていた。また食事時の姿勢崩れもあり、食物のリーチのしにくさや食べこぼしも見られた。本人の楽しみである食べることを安楽に、楽しく行っていたため車椅子環境の見直しを実施した。

2) シーティング評価

マット評価では骨盤後傾位で後方重心、介助バーを使用し自力での座位保持可能だが上肢の動作が加わると座位が後方へ崩れてしまい、Hoffer座位能力分類2~3レベルであった。

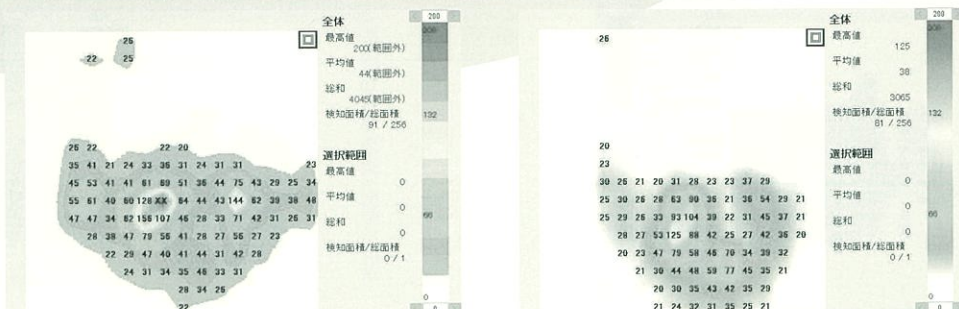


図2 | 特養事例 座位姿勢と圧分布

左: すべり座 左下: 左坐骨結節に高い圧力値 右上: 頭部支持の姿勢 右下: 坐骨結節部圧軽減

入居時は普通型車椅子とジェルクッションを使用していたが、殿部の前方へのズレが頻回に見られる状態で、食事時など上肢の動作時では体幹の伸張による代償運動が出現し仙骨座りになる座位姿勢の崩れが見られることから、職員が頻回に姿勢修正を行っている。股関節の可動域制限による車椅子の不適合と殿部の痛み、動作時の体幹伸張による代償運動が見られ、逃避と体幹・肩甲帯周囲筋の過緊張による可動性の低下による姿勢の崩れが生じていると仮定した。

3) 圧分布測定と車椅子の対応

殿部の痛みの訴えがあることから、圧分布測定実施した結果、左坐骨部の圧が高値を示している状態であった(図2左、左下)。対応として、ティルト・リクライニング車椅子を使用し、股関節の可動域に合わせてリクライニング角を105°、活動姿勢と座位安定のためティルト角を10°に設定した。次に左足関節尖足位となっているためフット

レッグサポートのエレベーション使用、さらに右股関節外旋・外転傾向によりフットプレートに接地困難なため、接地面積拡大を目的にポジショニングピローを使用した。また活動座位の耐久性が1時間程度であったため、食事などの活動時に集中できるようにティルト角度20°にて休息姿勢の設定を行った(図2右下)。その結果、圧分布測定でも殿部の痛みとしての坐骨結節下の圧力値が減少した。

4) 結果とまとめ

① 股関節の角度と座面の角度を合わせ、ティルト機能により座位重心を後方に移動させることで安楽な姿勢保持できリーチ時に見られていた体幹伸張による肩関節の代償運動が軽減し肩甲帯挙上の代償運動へと変化した。体幹の伸張が減少したことにより殿部のズレが生じにくくなり、食事での姿勢修正回数が軽減した(図3)。② 上腕部を体側に付け食事動作を行っていたが、体幹の支持



図3 | 食事姿勢の比較

左：すべり座りにより頭部の緊張が高く上肢が引けた状態
 右：頭部保持がされ右上肢が使いやすい状態

性が向上し肩関節の可動性が得られ、リーチ範囲の拡大から、お膳の奥まで手が届くようになり食事動作が行いやすくなった。③坐骨部にかかっている圧に関しては、下肢のセッティングとティルト・リクライニング調整により坐骨部への減圧が可能となり、ご本人からも「楽になった」との返答があった。本人が殿部をずらす場面が少なくなったことから安楽な姿勢を取っていただけるようになった。

今回ご入居者の身体機能や座位能力に合わせた車椅子環境を設定したことにより、筋緊張の緩和や動作性の向上が認められた。今後においては、活動姿勢と休息姿勢の使い分けを行い、活動姿勢としての食事動作の改善を図り、より良い日常生活を過ごしていただくためのシーティング・チームの活動を進めたい。

なお、上記2事例については、倫理的配慮として文書にて同意を得ている。

おわりに

今後はシーティングの重要性を施設内外の介護

支援専門員等と共有し連携することで通所サービスや短期入所サービス等の在宅サービス利用者へも最適なシーティングの提案を進めていきたいと考えている。

高齢化の進展に伴い介護技術は年々進化し続けている。技術向上の背景には介護市場の拡大による介護機器のめまぐるしい進歩があり、介護ロボットの実用化も進められる中、更なる技術の進展に期待がかかる。誰しものが望む幸せな老後の実現に向け、介護現場の当事者の立場から常に最新最先端の技術力を担保した施設運営のもと地域福祉の増進に寄与していきたいと考える。

●文献

- 1) NPO日本シーティング・コンサルタント協会ホームページ
<http://seating-consultants.org/>
- 2) 木之瀬隆：医療機関のシーティングから在宅支援に向けて。地域リハ 13：296-300, 2018
- 3) 木之瀬隆：地域包括ケアシステムのシーティングと多職種連携。地域リハ 13：372-377, 2018
- 4) 木之瀬隆：これであなたも車いす介助のプロに！。中央法規出版, 2008